

---

# 河川敷幻想

笹木 均虫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

河川敷幻想

### 【Nコード】

N3051BA

### 【作者名】

笹木 均虫

### 【あらすじ】

崩壊したテキストポからの脱出です。mixiの超短編でもきんのハンドルで載せています。ちよっと有り得ない不思議な物語の掌編集となります。

## 月とゴミ

その流れ星は沢山で

それはそれは沢山で

でも誰にも見られずに

通り過ぎてしまいました。

その夜は、雲が流れる様に飛び、雨が降ったり止んだりを繰り返して、晴れ間が見えたと思うとすぐに雲が空を覆う繰り返しで随分前からテレビで報道していた沢山の流れ星は見られそうに無かった。その流れ星は地球の傍を通る沢山の塵芥の様な宇宙塵の集まりが落ちて来たもので、余りにも小さくて大気圏で燃えつきしまう程に小さい物であるとの事だった。もし晴れていれば、きっとその有様はあの有名なトリフィドの時代というSFの冒頭を思わせるかのような、前例の無いような天体ショーになる予定だった。しかし僕の目に映るものは、流星の雨ではなくて、真正銘の水の雨だった。

そんなものだから、僕は深いため息を付き、夜長をゆっくりとお茶を飲んで過ごした。流れ星が見えた時に唱えようと考えていた願い事もすっかり頭の中から消失し、その代わりに漫画本を開き、饅頭をいくつも口に放り込んだ。その漫画が面白くて、ついついお茶も飲み過ぎたので、どうしてもトイレに立つ回数が多くなった。日付けが替わり、雨がようやく止んだ頃にトイレに立つと外でガソリンと音がするので、僕は、この小さな河川敷の町に時折出没するという兄弟狸がやってきたのかな？と思いつき、そうならば流星群の代わりに見てみよう、脅かさない様にそつとアパートのドアを開けて外に出てみた。するとアパートの脇にある共同のゴミ集積場の前では、お月さんがゴミ袋を収集場所に置いて上からカラス避けのネッ

トを被せている所だった。最近、深夜にゴミを出すと大家さんから五月蠅く叱られるので、「夜に捨てちゃ、だめだよ」と僕が注意すると、お月さんは飛び上がって驚き、そのまま雲の切れ間へ飛んで逃げ帰ってしまった。そして、あたかもずっとそこにいたかのように、雲の隙間でそっぽに向いてから雲の中に隠れてもう出てこなかった。まあいいか、人のゴミだし放っておこうと部屋に戻ってからやっと床についた。

翌朝、ゴミ収集車がひとつのゴミ袋を残して去って行った。袋には注意書きのシールも貼ってあった。なんでだろう?と思つて近づいてみると袋は破け、中から黒い石がごろごろ顔を出していた。そのうち一個をそつと手にとってみると大ききの割りにとても重い。見れば見る程にそれは隕鉄らしかった。どうやら、お月さんは昨晩自分の所に落ちてきた物をわざわざここに捨てに来たらしかった。

僕は珍しいものだし、手ごろな大ききの隕鉄を持って部屋に飾って置くことにしたが、とてもその黒いものに何かをお願いをする気にはなれなかった。しかし、その晩に沢山の流れ星が空中を飛び交っている夢を見た。その中で僕はただ何も考えずにうっとり空を見ていた。たとえ夢の中でも久々に見る夜の空だった。

## ビールを飲みながら

クーラーも無い部屋は夜になってもとんでもない暑さだっし、じめじめとした風が開けた窓からどろんどろんと入ってくる。じつとしても汗がじわりと出てきた。「あれまあ」とお月さんは僕の部屋でビールを飲みながら小さく叫んだ。「なんでゴミを飾っておくんだい？」それは、以前お月さんが僕のアパートのゴミ捨て場に捨てていった隕鉄の一つだった。沢山あったけど、形が良さそうなものだけとっておいて、あとは近くにある河川敷に捨ててしまったのだ。

「ん？ちよつと珍しいからね。」僕は、きんきんに冷えたキユウリに塩を軽くまぶして口に放り込んだ。瓜らしい香りが爽やかだ。

「へえ、欲しければ幾らでもあげるけど」お月さん空を指して言った。本来ならそこに居る場所だが、曇っていて誰にも見られない事を言いことに職場放棄をしているのだ。

「いや、これ一個あればいいよ」と僕は断った。月にある隕石とか隕鉄などごっそり持ってこられてはたまったものじゃない。何かで読んだが月の裏側は月が地球の周りを回り初めて以来の隕石がある筈だ。

「ふーん、要らないのかい」お月さんはビールをぐびぐびと飲んだ。「どっさりあるのにさ」

「それより、こっちに隕鉄とか捨てちゃダメだよ。あれ、燃えないからさあ」

「燃えないゴミの日もあるだろ」お月さんは、してやったりという満面の笑顔で言った。

「もう」僕は、役所の清掃局から渡されたゴミの分別表を台所の壁から剥がしてお月さんに見せた。そこには、分別して出すべきゴミの種類が一覧で書いてあった。

「隕石も、隕鉄もここに書いてないだろう？」僕は分別表を指で指しながら言った。

「じゃ、あれはどこに捨てるんだよ」

お月さんは、僕が飾っておいた隕鉄を目で指した。

「太陽にでも捨てたら？」僕は、それが一番もつともらしい考えと思った。どうせ太陽の芯は重い鉄とかで一杯の筈だし

「いや、あいつ意地が悪いんだよ」とお月さんは、こそこそと言った。まるで夜の夜中に太陽に聞かれるのが怖いみたいだ。

「昔さあ、でかい奴が落ちてな」お月さんは両手を大きく広げてみせた。

「まあ、痛いなのなのって。そこで太陽にお願いして、あの熱々の溶鉱炉に放り投げたんだ。でも、あいつそれが届く前に横に避けやがってさ」

まっすぐ投げて、お月さんも太陽も動いているからそう簡単に当たるとは思えないと言うのは止めた。

「でな、面白いことにそのゴミがさあ太陽の周りを半周してから、速度を上げやがってね」お月さんは、ふっと言葉を止めた

「これ誰にも言うなよ」

「うん」と僕は返事をした

「この地球に当たってしもつた」

「それって、最近？」

「いやあ、もうかれこれ6500万年前かなあ」お月さんは、缶ビールをもう一缶飲んだ。

「しかし、このビールってやつはいいよねこども暑いと、たまらんよ」お月さんは、ジュラシックパークって昔の映画の題名が書かれた下敷きで顔を扇ぎながら言った。

「しかし考えてみればあの頃の地球も結構暑かったけれど、俺のおかげで暫く涼しくなったのさ」

「いや、涼しいというより極寒になったのじゃないか？」

## 秋刀魚の味

夏の恋が秋に終焉を迎えるのは

別に珍しいことじゃない

涙が流れるのは秋刀魚の煙のせいだし

毎日秋刀魚を食べているのは

夏の間には貴女に貢ぎすぎたからじゃない

太陽がすっかり沈んだ夕暮れの河原にひとつの七輪を置いて、のんびりと炭を熾しているとの河川敷の遊歩道を犬を連れた人々が珍しそうに僕を見て通り過ぎて行った。湿気った炭は、時折爆ぜて小さい火の粉をパチンと言う音と共に宙に舞い上げた。「腹減ったなあ」と僕は独り言を言いながら、団扇で風を七輪に送り続けた。準備が遅れたというか、近所のスーパーで安い秋刀魚がタイムセールで更に安くなるのを狙っていたので、こんな時間になってしまったのだ。

やがて火の威勢良くなった処で僕は、塩をふっっておいた秋刀魚を金網に置いた。湿った秋刀魚がじゅうと言う音を立てた。そこで更に団扇で風を送って火勢を上げると、やがてぼっ！ぼっ！と脂が燃えて炎となって立ち上がった。そして当然の様に、香ばしい香りとむせ返るような煙が立ち昇った。これこそ秋刀魚の醍醐味。安いと言っても今年の秋刀魚はまるまると太っていて、当然脂も乗っている。あがる煙の量も半端なものじゃない、僕は時折変わる風向きにまともに煙を浴びせられては涙を流した。そして涙を、袖で拭き終わってから顔を上げると煙の向こうにお月さんが立っていた。

「畜生！！なんだ今日は、やたら煙くしょうがねえと思ったらお前かい」とべらんめえ調で腕組みをしながら僕を見下ろしていた。「まあ、家だけじゃないだろうねえ」と言っただけで立ち上がって当たりを見回せば、秋の夜空の中をうっすらとした煙があちこちから漂

っているようだった。そしてまた、しゃがんで団扇を動かした。すると煙がまともにお月さんにかかったものだから、「この野郎」と言いながらお月さんは脇に飛びのいた。まあまあ不可抗力だってばと言つと、怒るお月さんはそれでも許してくれそうに無いので「まあ、まあ、僕の部屋で一杯やっていなよ、後で秋刀魚も肴にするからさ」と食べ物で懐柔した。すると、「秋刀魚は要らないが、ビールは欲しいな」とお月さんは、ニコニコして僕のアパートの方に歩いて行った。勝手知つたる他人の家というがこいつにはビールを隠しおおせる場所がないから放っておけば勝手に飲んでいるだろう。しかしビールとは言え、本当は酒税法の安いやつだけだ。

この秋刀魚が焼けると、既に3枚に下ろしておいた別の刺身用の秋刀魚をクーラーボックスから出して、トーチで皮の方にさーっと焼き目を入れた。これまた、脂でパチパチつと小さな火の子が立つのがなんとも可愛い。僕は秋刀魚のタタキとか勝手に呼んでいるが、これが脂っこい秋刀魚の刺身にだけに、脂が丁度よい塩梅に溶けてくれるのでトロみたいになるのだ。

お月さんは、もう2缶もビールを飲んでいた。冷蔵庫にあった豆腐が冷奴になつて勝手に食べられていた。しかも茗荷までちゃんと切つて乗せているのがなんとも憎たらしい。熱いうちが一番美味しい秋刀魚を長皿に盛りつけその脇には、大根おろしを軽く絞つてから山形にして置いた。そして、叩きは刺身の様にきちんと切つて盛り付けて、上からざつと生姜醤油をかけた。

「煙くなつてまで、そんなもの食べたいのかねー」お月さんは、焼きさんまに箸を伸ばして身がするりと骨から剥がれるのに驚いた。おやおやこれは具合がいいな。

「脂が乗っているからねえ身離れもいいのさ」そして、口に入れてビールを飲んだ。何も言わずに、また一切れ秋刀魚を箸でつまんだ。そしてまた、飲んだ。



「ふむふむ、まあ不味くは無いじゃないか」と秋刀魚の肝をつまんでそれを口にして「おう苦いなあ、でも美味しいぞ」とまたビールを飲んだ。

「こうなつてくると、冷酒も欲しいね」お月さんは、じつと僕の顔を物ほしそうに見つめた。

「冷蔵庫は満杯、でも懐はからっぽでさ」僕は、首を振った。

「だから、残念なことに冷酒はないよ」ビールを飲みながら、秋刀魚はすっかり二人の腹に収まってしまい、秋刀魚の骨までしゃぶりながらお月さんは、名残を惜しんだ。

「ふむ、もう終わりかあ」お月さんは、腕を組んだ。「もつと、食べたいな」

「もう家には無いよ」食べる物なら冷蔵庫にまだたくさんあるけど、秋刀魚は余分に買っていない。

「分かっているけど、美味しかったなあ。」お月さんは、まだ名残り惜しそうだった。そして骨と頭だけになった秋刀魚をしみじみと眺めながらつぶやいた。

「そついや海を照らせばこの魚は結構見るよなあ」お月さんは、何か考えてから腰をあげた。

「ふむ、そうすれば焼けるかな」と小さくつぶやいて、ご馳走さまと言ってからそつと秋風の通る窓から出て行った。

唐突に静かになった僕の部屋を、秋の満月が静かに照らした。僕はお月さんに見えるようにクーラーボックスから冷酒を取り出してガラスのグラスに注いだ。どこかから「嘘つき！」という言葉が聞こえたが、無視してぐいっとそれを飲んだ。不意に忘れるつもりでいた名前と涙が出そうになって、それを酒でぐいと押し戻した。今日の夜長は、酔わないと寝れないみたいだったのさ。それをお月さんに飲まれたら辛い夜になってしまう。

暫くして、月で噴火の様な現象が見られる現象が続いた。ニュース映像では月のどこかからか煙の様な物が靡いていたようであるが、

いや、まさかねと思いつながら、僕はまた食卓を占領している秋刀魚とニュースの映像を交互にみていた。

## 芹之栄

それは僕の目からすれば上等な芹だった。根がしつかりついているし何より新鮮だ。ただ、それを僕の家を持ってきた少女は尻尾を生やしているし鼻の横には長い4本の髭が左右に伸びていたから、どう見ても若い狸が化けそなたとしか思えなかった。

「昼間、野川で見っていたの？」僕は、芹を眺めながら訊いた。すると少女狸はうなずいてみせた。

野川は家から離れた所にある小さな河川だが、余り人の手が入っていないので今でも周囲には多くの草花が生えているし、実を成す木も多い。特に今頃の芹なんかは、柔らかいし香りもいい、だから僕は何時ものように錆びた自転車で目的の場所まで行くと川岸まで降りて食べる分だけの芹を摘んだ。その途端いきなり上の方から女性の怒鳴り声が聞こえた。

「何をしているんですか！」

「え？」僕はあっけにとられて、声の方を見た。すると僕が止めた自転車の横で腕になにやら腕章らしいものを付けた女性が僕に向かって指を刺していた。「直ぐに出ていってください。」こつも高飛車に言われるとなにか悪いことをしたのだろうと考えざるを得ないので僕は手にした芹を置いて上上がった。「ここで芹を採ったら駄目ですか？」僕は女性に訊いた。

「そうですね、野川の自然を荒らさないでください」と女性は腕章を僕に見せようとしたが、良く見えなかった。いや見る気さえなかった。

「そうですね」と引き下がって自転車にまたがるとすすり帰ってきたのだ。

その野川の芹が僕の手の中にあつた。

「ありがとう、よかつたら鍋でも食べるかい？」と少女に訊くと小さくうなずいてみせた。

「じゃああと2時間くらいしたらまたおいで」少女はまたうなずいて何処かに行ってしまった。

その時は丁度ご飯が炊き上がったところだったので、僕はそれをピンポン玉くらいの大きさにまるめると、網でじんわりと焼いた。だまこ餅とか、山餅とか言われる類のものだ。それから、ごぼうを削ぎ切りにして、葱を斜に切り、芹の根はきちんと洗って根も食べることが出来るようにした上で根と葉を切り分ける。ただ切っていると、唐突に昼の記憶がまた湧き出てきた。守るだつて？ 芹はあの小川の岸沿いに延々と生えているし、年に何回かは除草作業のため一切合財岸に生えている草はすべて刈られてしまふというのにだ。希少な種を守る為にそういう活動なら分かる、しかし本来どこにもある物だとうなんだろう？ むしろ食べたり、遊び道具とかにしてより身近な存在にすれば、雑草とか言わずに名前も覚えるし、より自然に親しみを覚えるのじゃないものかなとなにやら怒りさえも覚えだした。

そろそろ狸が来る頃を見計らって鍋にはスーパーで買った比内鳥スープを入れて煮立てて待った。しかし時間になつても狸は来ず、獣だけに時間にはルーズなのかなと思ひ、一時間だけ待つてから僕は鍋に鶏肉と野菜と豆腐と放り込んだ。だまこ餅は食べる直前に入れないと煮崩れるからそれは一番最後だ。熱燗を飲み、狸はどうしたのかなと思ひながら鍋を食った。そもそも量が多いので、僕のおなかには狸の置物のようにはんぱんに膨らんだ。それでも未だ鍋には具が残っていた。二人分としても作り過ぎたみたいだ。

翌日、どんよりとした雲が覆う中、狸はどうしたのかなと自転車で野川に向かうと途中の県道の道端に狸の死骸がつぶれたまま放置されていた。それがあの少女狸かどうかは分からなかったが、僕は一旦家に戻って昨日の残りのだまこ餅を一個だけ狸の横に添えた。

雪がちらちらと舞い降りはじめた。

## 雪だるま会議

初春という言葉が霧散してしまう程に地球は遊んでいるかの様に突然に雪をふらせる。交通機関はすっかり麻痺してしまい。僕には嬉しい休みがころがりこんできた。しかし転がり込んできたのは、休みだけではなかった。

コンコンというノックを聞いてこんな日に遊びにくる奴もいないだろうから、きっと何かの勧誘か訪問販売であろうと居留守を使った。

「開いているぞ」なにかマスクをしたようなくぐもった声だ。鍵をかけていなかったかと気づいてと玄関に行ってみれば、

雪だるまがころころと入ってきた。それも、次々と4体ほど。雪だるまは、そのまま奥に突き進みコタツの周りに集まった。

「あんたらは何だ？」と言うのも馬鹿馬鹿しいがつついっいつい言ってしまったからしょうがない答えも聞く気になれない。しかし4体の雪だるまは完全に僕を無視した。どれも同じ姿に見える古風豊かな純然たる和風雪だるまが互いに目くばせだけしている。その目も当然豆炭だし口は炭ときたもんだ

「さーて、第1回ゆきだるま会議を始めますう。」奥の雪だるまがのんびりとした口調で開始の宣言をした。

「か、会議ってここは僕の部屋だぞ」僕はその雪だるまに抗議した。「何を言うつ外野。ここは23号室だな」が、外野だと？僕はこれでも野球をやらせればと言おうとしてやめた。僕は球技がダメな奴なので内野の様に球の行き来が激しい場所の守備はやらせてもらえないのだ。当然外野を守りつつ球が来ないことを切に願うのだ。

だから、そうだと答えた。背をむけた雪だるまがくるりと頭だけを回して僕を睨んだ

「ならば、本日の会議室はここだ」と言ってからコホンと咳払いを

してまたくると頭を元に戻した。

「では、最初の議題ですが火星移民問題となっております」右の雪だるまが小さい声で言ったこいつが進行役なのか？

「いよいよ来年の冬に火星の極に火星のテラフォーム化を目的とした移民船が行く事に決まり」おおお〜つと他の3人の雪だるまが雄たけびをあげた。話の腰を折られ、右の雪だるまはコホンと咳払いをした。

「われわれ雪だるまも火星においてその遺伝子を伝える計画を立てようかな〜と思います」おお〜やれ〜！とまたしても雄たけび、しかし雪だるまに遺伝子があるのか？僕は首をかしげた。

「では、発言の権利を決めたいと思います」と言うと右の雪だるまは先っぽが二股に分かれた枝でできた腕をくねくねさせて、一個のどんぐりを上手につまんでコタツ板の上でころんところがせた。

「に、2ですね」と左の雪だるまが言った。「で、では僕から発言します」

「どこが2なんだ？ただのどんぐりじゃないか？」思わず口に出ってしまった。

「馬鹿には、この賽の目が見えないのよ」背をむけた奴がまたぐりと後ろをむいた。首だけ振り向くのは気持ち悪いからやめて欲しいが、雪だるまならそっちの方が簡単だろう「ちなみに、これはどんぐりではない、はしばみだ．．．それにどんぐりという木の実はない、雑草という草が無いようにな．．．完全に馬鹿にされた。

「ち調査結果によれば、かか火星には火星人が居るようです。お、おもにタコという生物に似たちち知的生物に似ているといいい言われていますが．．．小さい緑色のヒューマノイド型とも言われています。」

「正確に分からないのか？」と正面のだるま

「ははは．．．い、ええ．．．か火星年代記と呼ばれる本によればじ．．．人類が移住してかなりの年月が経過しているよよ．．．ようです」

「なに!？」とまた正面

「ニュースでは、人類初と言っているがこれは偽の情報である？」  
「そ・そこまでは、不明です」と左の雪だるまはべそをかきそうになった。

「ほ他に、じ人類が既に移住しているとおおお思われる文献として、  
かかか火星の虹とかス・スター・レッドとかがあります」

「おいおい、デジャー・ソリスを忘れていないよね」と後ろから僕  
が言つと

「火星のプリンセスなんか知りません」と正面の雪だるまが、一冊  
の本をぱつと後ろに隠したそしてびりつという音がして表紙のない  
文庫本が横に放り投げられた。

「あ、その表紙！！こら！！」文庫で一番好きな表紙を、デジャー  
ソリスの姿が一番

綺麗な表紙をおおと言う僕の横面を、後ろ向きの雪だるまが叩いた  
「お父さんにだって叩かれた事が無いんだぞ！！」とは言つなよ。  
「と雪だるまが言った。

「表紙にはこだわらず、内容を吟味しなさい」

「どうやら、火星と人間の関係については、情報が不完全なようだ  
な」後ろ向きの雪だるまが言った。

「し、しかしひとつだけか・確実なことがあります」

「なんだ？」

「か火星には知的生命が居るか、今後居るようになります」そりゃ  
そうだろうな。

「そんな！あたり前田の・・・」と正面の雪だるまが大声を出し始め  
た時に左のやつがはしばみを投げた。

「3なら私だ」後ろ向きのだるまが口を開いた。「今回の乗組員は、  
4人」

僕はびくつとした。現在50人ほどの候補はいるが、さらに10人  
ほどに絞られたのち前日の健康診断によって乗組員が決まるはずな  
のだが？なぜこやつらは知っているのだ？

「船長にペリー・ローダン、電子技師にレジナルド・ブル、医師と



してミスター・マリック、天文学者としてイルカが行くようだ」ペリー・ローダンが行ったのは火星じゃなくて月だろうがしかも登場人物を間違えているし。ぼくはちらりと本棚を見た。ローダンシリーズの一巻がない

「なあに？イルカあ」正面が叫んだ

「バンドウイルカじゃなかったかな？」右のだるまが言った。

「種類は尋ねていなあい」正面が怒った

「バンドウだろうが、ゴンドウだろうがシャチだろうがそれは問題ではない、それよりもイルカを連れて行くことおは、イルカの知性化に成功したということかあ・・・人類の文明はそこまで進んだのかあ？・・・」

正面は腕組をした。

「では、その乗組員にいかにしてコンタクトをとるかだ」また、はしばみが投げられた。「2かよお」と正面がうなづいて、即座に賽をなげた

「1・・・僕ですか」と右のだるまも賽を振ろうとしたところを正面のだるまの手がそれを掴んで抑止した

「ず、ずるいつす」

「ずるいも糞もあるかあ、それ意見を言え、今言え、すぐ言え」

「うーむ」と右はうなづいた、そしてはたと手を打った

「コンタクトといえば、皆でを握って輪を作り、精神を集中する方法があります。」

「それは、ゆーほーって物を呼ぶときに使う手じゃないのか？」後ろ向きの奴が言った

「ゆーほーとコンタクトが取れるなら人間とコンタクトをとるほうがきつと簡単っす」右の奴は、自慢気に胸を張った。

「そーかなあ？」

「恥ずかしいぞ」

「やややだ」

「大丈夫っす闇夜に紛れてやれば」

「闇夜にか？」  
「あいつが見ているぞ」  
「あああああいつって」  
「雪が降っている日なら大丈夫じゃないっすかね」  
「念が届くか？」  
「雲に反射していいかも」  
「え？反射だあ？」  
「アマチャハムって何か美味しそうなハムを趣味にしている人間が雲で電波が反射してどーのこーのって言っているのを聞いた事があるっす」  
「雲があれば、あいつも見られないな」  
「あいつってだれた」と後ろから声がした。みれば、お月さんが酒壺を片手にして立っていた  
「まだ昼っすよ」ゆきだるまがしどろもどろに言った  
「今日は新月だそして新酒だあ」と壺を高々と持ち上げた  
「恐れいったかあ」ゆきだるまがおー！って雄たけびをあげた。だめだ、もうできあがっている。  
「おい！ゆきだるま！」お月さんがわめいた。  
「そんなに火星に行きたいか」  
「おおお〜！」と4人のゆきだるま、あれれ議題は火星に行く話では無いでしょ？と不思議がる僕を無視して話は進む。  
「それはそんな簡単なものじゃないぞ」とお月さんにしては珍しく神妙に言った  
「宇宙にはいくつもの塵があつてな、そのほとんどが氷とかなんだ」  
「よ  
「ほほう」と雪だるま  
「水の中にある結晶化した記憶に、宇宙からきた水の話が残っておりますな」  
「なるほど、我々が宇宙に行きたがるのは帰巢本能って奴ですかな」  
「そうじゃねえよ、お前らの前に行った奴らが結構いるってことよ」

お月さんはケツと酒を煽った。

「そして、どいつもこいつも彗星になっちまった」お月さんは、しくしくと泣いた

「いいいやはや、す・彗星もいいかも、た・太陽系から脱出して他所の恒星の重力井戸に落ちてみるのもいいかなあ・は・はは」

「お前さん、言いこと言うつすねえ、それなら遣伝子をどうのこうのとみみっちはいことは言わないでここはどーんと、うちらで勝手に進出したみたいっすね」

「うん、それはもつともらしいかも」

「そうまでして行きたいのか？」

「いくいく」つと雪だるまが合唱した。

「じゃあ付いてこーい」お月さんと雪だるまは唐突に部屋を出て行った僕はやつと暖をとるためにコタツに入ろうとしたがやつぱり微妙に湿っていた。

ため息をついて、コタツに潜りこむのをあきらめこたつ布団を布団乾燥機に入れ酒を飲みながら乾くのを待った。そして、やつと乾くとコタツの中にもぐりこんで静かな時間を取り戻したことに奇妙な充足感にみたされて転寝をしてしまった

「こらーいれろ」って再びお月さんが帰ってきたのは暫くしてからだった。

その暫くとはどれくらいとは聞かないで欲しいなんせ寝ていたし、時計も見ていなかったんだ。

「ん？雪だるまは帰ったの？」僕は、ごろんとしたまま体を伸ばして電気ポットを傍に引き寄せるとお茶の用意をしてお月さんにも淹れてあげた。

「いや、職場に戻ってから雪だるまを火星にむけて投げてやった」

「え！？」

「投げたの？」

「そう、力一杯なげた」お月さんもずっとお茶をすすった

「火星つて動いているよね」

「ああ、動いている」

「軌道の計算とかは？」

「してない」

「すると、どこかに飛んでいかないか？」

「大丈夫、あいつは戦いの神さんといわれているのだろ

攻めも上手ければ、守備も大丈夫だよ、どんな悪送球もきちんと受け取るさな」お月さんは煎餅をかじった

「しかし、本当は遺伝子をどうのこうのって言ってたよ。あいつら僕は蜜柑の皮をむいた

「別に伝えても伝えなくても雪があれば、ヒトはどいつもこいつも雪だるまを作る様に遺伝子に刷り込まれているって」

「そ、そんなものかな？」

「どの国にだつて雪がふれば雪だるまはできるじゃないかあれはきつと遺伝子レベルの話じゃないのかな」

「そうかな？うんそうかもね。」蜜柑は甘かった。

すっぱくなければ、他は別にどうでもいいや

計画は、肝心な所で何度か足止めをくらったが、やがて火星の極から雪だるまと一緒に映る乗組員の姿が送られてきた様子がテレビに映された

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3051ba/>

---

河川敷幻想

2012年1月14日14時47分発行